



今年の秋の企画催事の一環として、企画展示では大学所蔵資料の茶器コレクションから瀬戸焼の現代作家の作品を紹介します。さらに会期中には、関連テーマで、陶芸家と茶室建築研究者による講演を行います。展示および講演の概要について、館長より触れさせていただきます。

陶芸家、加藤幸兵衛氏を訪ねて

荒屋鋪 透 (中部大学民族資料博物館 館長)

民族資料博物館で10月19日から始まった企画展覧会『河本礫亭・五郎とシルクロード』展(2018年1月11日まで開催)準備のため、陶芸家の七代加藤幸兵衛氏を多治見にお訪ねした。市之倉町の仕事場には登り窯や工房などと共に、市之倉さかづき美術館があり幸兵衛氏は館長である。展覧会初日に開催する氏の講演会「染付とシルクロード—河本礫亭・五郎展によせて」の打合せがすむと、わたしたちを促すように、幸兵衛氏は美術館を案内して下さった。そこには陶芸家で人間国宝であった父、故・加藤卓男が収集した古代ペルシアの素朴なラスタースタイルによる陶器と、卓男が技法を蘇らせた完成度の高いラスタースタイルの磁器などが展示されていた。ラスタースタイルとは幸兵衛氏の解説によると、「鉛を含んだ錫釉で整えた白い器面に特殊な酸化金属(銀や銅)を呈色剤(絵具)として、低火度・強還元焰によって焼成したもの」という。なかなか難しいが、ラスタースタイルの文様は玉虫色にきらきらと輝くのである。ペルシアの華ともてはやされたが、この技法は世界のやきものの中で、最も困難な技法のひとつなのだ。

加藤幸兵衛氏に講演会をお願いした理由は、陶磁器に色彩を施す、あるいは絵を描く技法「染付」について、その歴史と技法の伝播を知りたいからであった。なぜなら民族資料博物館で今回、紹介する河本礫亭は大正から昭和にかけて活躍した瀬戸の陶芸家だが、染付という伝統技法を継承して、青い絵柄の美しい陶磁器などを残しており、中部大学の収蔵する礫亭コレクションの公開は、そうした染付の技法をみるよい機会だと考えたからである。『河本礫亭・五郎とシルクロード』展カタログに寄稿された幸兵衛氏の文章によると、染付の原料である呉須石(酸化コバルト成分を多く含む鉱物)は中国では唐代に使われ始め、元、明代に全盛期を迎える。元来この鉱物、呉須石は「回青(ホイチン)」と呼ばれ、ルーツは西アジアだそうである。ペルシアで生まれた染付は13~14世紀に中国に伝播し、元代の染付磁器が誕生している。そしてつづく明代には遠くヨーロッパへと渡るのである。壮大なドラマである。シルクロードは絹だけの道ではないのだ。

市之倉さかづき美術館の展示室に、イランからの留学生(といっても大学の教



員)の作品が飾ってある。「ここではうまくできましたが、帰国してむこうで制作するとやはり、違ったものができてしまう」と幸兵衛氏は嘆かれた。イランと日本の多治見では土が違うのだそうである。

ペルシアで生まれた技法、ラスタースタイルはその子孫の国イランではいつしか消滅してしまった。滅んだのである。しかしこの多治見の地で加藤卓男、幸兵衛父子が美しくよみがえらせ、イランの人々に伝承している。思えば、これもまた壮大な挑戦であろう。

河本五郎は戦後、礫亭の養子となった陶芸家、職人と物資に事欠く時期の礫亭を助け染付を学んだが、自身は瀬戸焼の原点ともいえるべき「灰釉」という技法に回帰して、現代的な造形性をもつ力強い作品群をつくった。同じ瀬戸焼も陶芸家によってこれだけ、異なる芸術世界を構成することが可能なのである。陶磁器をとりまく世界は広い。展覧会会期中の11月14日には、京都工芸繊維大学の矢ヶ崎善太郎氏にも講演会をお願いした。題して「茶室に学ぶ、茶人の知恵」。

ぜひ多くの学生、一般の方々に見ていただきたい企画である。

索引

5月 特別講座(古典絵画)平成28年度 受講生作品発表展示

日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員 下川辰彦
民族資料博物館 原田千夏子

5月 平成29年度 特別講座(古典絵画)開講

民族資料博物館 原田千夏子

◇巻頭

陶芸家、加藤幸兵衛氏を訪ねて

民族資料博物館館長 荒屋鋪 透

2017春季・夏季行事報告

◇企画展示

1

2

2

◇実技講座

◇夏季企画展示

6月 「樹幹 — 人と自然の共生」

現代美術家・伊勢市立伊勢古市参宮街道資料館 館長 世古富保

◇夏季企画展示ギャラリートーク

6月 「樹幹 — 人と自然の共生」

記録 民族資料博物館 原田千夏子

◇トピック

「大学の茶器コレクション」

学校法人中部大学 管財部施設課 鈴森正基

2017 下半期(秋季・冬季)行事案内

3

3

4

4

5
月

企画展示

平成28年度 受講生作品発表展示

【期間】 2017年5月9日(火)～5月23日(火)
【会場】 中部大学民族資料博物館 多目的室、1階エントランス

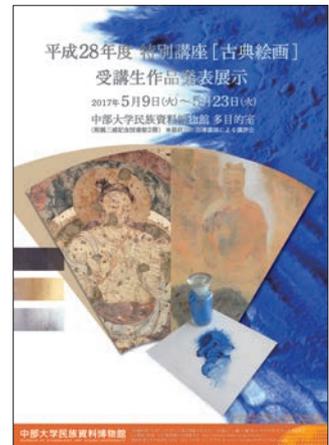
指導講師：下川 辰彦 (日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員)

担当：原田 千夏子 (民族資料博物館)

特別講座(古典絵画)は、当館主催で通年にわたり日本画の作品制作を行う一般対象の講座である。例年、年度の集大成として年度末に制作作品の発表展示を開催してきたが、平成28年度受講生の場合は、2階の展示室の事情で時期を遅らせての今年5月の開催となった。一年間にわたってじっくり作品に向き合うという姿勢は、制作者にとって工程作業を丁寧に取り組む心理的余裕が生まれ、また計画的な進行内容を一連の流れとして組み

立てて考える思考力も備わり、その結果、作品そのものの完成度も高まる傾向にあることが年度を重ねるごとに実感してわかる。

受講生のなかには、2作品を一つに見立てて連作のイメージを構想したり、また3作品を一つのテーマに構成して展示する作品に仕上げるなど、さらにはかつて制作した作品を再度見直し、再挑戦する場合もあった。作品制作には終わりがなく、本人の意識の持ちよう如何によって、より高めていく追求の繰り返しだと



(上下) 展示案内



展示室風景

指導講師による講習会の様子

いえるだろう。そのような心情のわずかでも抱き始めることによって、制作作品だけでなく古今の作品や歴史、また日常の風景に対峙するときの意識も深まるものと考えている。(下川、原田)

5
月

実技講座

平成29年度 特別講座(古典絵画)開講

【期間】 2017年5月10日(水)～2018年1月17日(水) 連続26回
【教室】 中部大学10号館106J講義室

指導講師：下川 辰彦 (日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員)

担当：原田 千夏子 (民族資料博物館)

特別講座(古典絵画)が今年度も始まった。毎年、指導講師によって講座内容に新たな要素が加えられる工夫がされている。そのたびに日本画の奥深さを思う。これまでのように絹絵、板絵などの日本画を和紙を基底材にする以外の材料に描くという、日本の伝統的な古典絵画技法と材料について、制作を通じて学ぶ他、今年度は、各自の創作作品と別に、古典絵画の絵巻物、国宝《鳥獣戯画卷》をとりあげ、場面

ごとに区切り、受講生全員が担当することで、一本の絵巻物の模写作品を完成させることが、全員の共通の課題とされた。

現在、受講生は、自身の作品制作の一方で、模写作品を同時に制作中である。国宝の法隆寺金堂壁画の模写事業にたずさわった経験を持つ指導講師によって、秘技とされる、古典的な材料の取り扱いや技法の指導を受けながら、さまざまな工程を進めている。こうした作業状況を講座の



(上下) 講座制作風景

補助としてつく学生も身近で観察しながら映像記録をとっている。伝統文化の具体的な構造を知る稀有な機会として少しでも感じていただければ幸いと思う。次回の発表展示もどのような展示風景となるか、今から楽しみである。(原田)

「樹幹 — 人と自然の共生」

【期間】 2017年6月1日(木)～8月11日(金)
 【会場】 中部大学民族資料博物館 シルクロード室 (一部)
 多目的室、1階エントランス
 【企画・制作】 世古 富保氏 (現代美術家)

このたびの企画展で、初めて千葉先生から企画のお話をいただきましたときには、民族資料博物館で発表させていただくことに、正直少し不安を覚えました。と言いますのも展示場の全てが民族関係の資料のため、現代美術である私の作品が周囲の雰囲気や壊さないか、また自身の作品が浮いてしまうのではないか、等々の心配事でした。初日までの三日前位に大勢の方々の応援



第1展示コーナー風景

を受け、無事に展示準備も完了し、その後館内の常設展示品を落ち着いて眺める時間もできました。すると、パプアニューギニアの武器や斧、仮面などの品々に、美術家として私が長い間目指してきた「自然の力や精霊の気のような生命感」を強く感じ衝撃を受けました。私は今まで沢山の現代美術を拝観してきましたが、それ以上に内に秘める精神世界を垣間見たわけです。更には、これら仮面や武器、道具などには、作り手の上手く造ろうという気取ったものが全く無く、造る対象物との間に微塵もすき間がないことです。これは世界の最高レベルといわれる現代美術作品すら滅多にお目にかかり



展示案内

ません。

今回の発表は、個人的には自分の作品が周りの素敵な展示品及び雰囲気非常に馴染んだように思いましたし、私にとっては何よりもパワーを授かった特別な発表となりました。

ギャラリートークにおきましては、千葉成夫先生が企画展示資料について丁寧に解説いただきました。また、多くの方に聴いていただき深く感謝致しております。本当に有り難うございました。(世古)

企画展示「樹幹 — 人と自然の共生」関連

【期間】 2017年6月1日(木)
 【会場】 中部大学民族資料博物館 シルクロード室 (一部分) 多目的室
 【出演】 世古 富保氏 (現代美術家: 展示企画・制作)
 千葉 成夫氏 (美術評論家・元中部大学教授)

6月1日(木)より始まった企画展示「樹幹」の展示作品制作者である、本学卒業生で美術家の世古富保氏と美術評論家の千葉成夫氏によるギャラリートークが館内の展示室にて行われた。現代美術作品が、どのような思考や感覚のなかで創造されていくのか、地域の美術ファンが集い、対話で交流するひとときを過ごした。

制作過程を重視する作家の言葉から、観賞者はさまざまに想像をかきたてられる。作家が制

作する行為そのものに意味を追求し、連続した所作を通じて、物質を扱う指先の触感を繰り返し味わいながら、いつしか自身の存在を忘れてしまうような精神の自由の境地を見出していく…そのような姿は、自己存在を追求する果てに、自らを自然に同化させることに喜びを見出す、まるで禅的な心境に向かう求道僧のよう、とも連想した。

作品の感じ方は人それぞれでよい、とのことで観る人も自分なりの共感のきっかけを考えてみ



(上下) ギャラリートーク風景

ると新たな観賞法の楽しさがみつかるのかもしれないのではないか、と思われた。(記録 原田)

大学の茶器コレクション



河本礫亭
《青華菓子鉢 (祥瑞写)》
(学校法人中部大学蔵)

中部大学では、中部大学第一高等学校 第7代校長の馬渡一生先生(故人)が収集されていた茶器資料、636点余を平成15年から13年間にわたり寄贈を受けました。これまで台帳整理作業が管理部署の管財部によって進められ、このほど基礎段階の作業がおおよそ終了の目処がついたこともあり、より多くの皆様に大学に関連する文化的教育資料として順に

公開させていただく機会を設けていくことになりました。

民族資料博物館では、この茶器コレクションのうち、地元の瀬戸焼の作家に焦点をあて、近世における瀬戸焼の海外交易の歴史を、東西文化との交流の発展のなかで、再確認するテーマを提案することで、東海地域と世界のつながりを考察する場としたいと考えています。

◇ 管財部担当者より

コレクションの内訳をみますと、種類は61種類に上り上位4位までが瀬戸・美濃焼で、234点の数を占めます。さらに産地別では、中部地方は美濃焼・織部焼等321点と最も多く、次いで関西地方の京焼・清水焼・信楽焼等65点、九州地方の唐津焼・伊万里焼・薩摩焼等40点の計426点となり、今回の秋季展示で披露した河本礫亭・五郎氏の作品は所謂瀬戸物にあたり、47点を有します。

北は福島の相馬駒焼から南は鹿児島島の薩摩焼と多様性に富むなか、また中部地方独特の、志野の動的な造形や織部の抽象的なデザインの面白みが生まれた環境のなかで、河本礫亭・五郎氏の作品が多くを占めたのは、あくまでも普段使いを念頭に置いた、流麗な曲線の造形に上品で精緻な絵付けを施した作風が、馬渡先生を魅了したのではないでしょう。

(管財部施設課 鈴木正基)

2017

下半期(秋季・冬季)行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇ 秋季企画展

「河本礫亭・五郎とシルクロード」

会 期：2017年10月19日(木)～2018年1月11日(木)

会 場：中部大学民族資料博物館 シルクロード室 他

◇ 秋季連続講演(秋季企画展関連テーマ)

10月19日(木) 第一回講師：七代 加藤 幸兵衛氏(陶芸家・幸兵衛窯)

「染付とシルクロード～河本礫亭・五郎展によせて」

11月14日(火) 第二回講師：矢ヶ崎 善太郎氏(京都工芸繊維大学准教授/日本建築史・伝統建築生産学)

「茶室に学ぶ、茶人の知恵」

◇ 企画展示

「平成29年度 特別講座受講生発表展示」

会 期：2018年3月22日(木)～4月12日(木) 予定

会 場：中部大学民族資料博物館 多目的室他(予定)

指導講師：下川 辰彦氏(日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)

展示最終日に指導講師による講評会を開催予定